

## 自主シンポジウム14

## 幼児期における障害理解指導の理論と実践

企画者：水野智美（桜花学園大学）・徳田 克己（筑波大学）

司会者：小川 圭子（南海福祉専門学校）

話題提供者：徳田 克己（筑波大学）

石上 智美（筑波大学大学院）

水野 智美（桜花学園大学）

田中 敏子（高岡西幼稚園）

## 【企画主旨】

ノーマライゼーションの理念が浸透しつつある一方で、障害者への偏見、特別視は根強く残っており、障害者を取り巻く環境は必ずしもよいとは言えない。障害者に対する適切な態度を形成するためには、幼児期からの段階をおった系統的な理解教育が必要であり、近年、その考え方が保育現場でも徐々に拡がりつつある。しかし、これまで実施されてきた調査（白澤ら、1999；富樫ら 2000 など）より、保育現場で行われている障害理解の実践は、計画的に行われたものが少なく、偶発的にまた単発的に行われているものが多いことが確認されている。また、統合保育を行っている幼稚園、保育所では、実際にクラスにいる子どものことを他児に理解させることに終始していたり、障害のある子どものお世話をすることが障害を理解させることであると誤って認識している保育者も少なくない。さらに、障害のある子どもが在籍しない幼稚園、保育所では障害理解指導を行っていないことが多いという現実もある。

そこで、本シンポジウムでは、幼児期の障害理解指導がなぜ必要であるのかについておよび保育現場で行われている障害理解指導の実際や配慮すべき事項についての話題を提供したい。

## 話題提供1：幼児期における障害理解指導の必要性

徳田 克己（筑波大学）

人間は多様である。そのさまざまな人間の価値を、すなわち自分自身とは異なる人間の価値を認めていくことこそ、障害者をはじめとする福祉対象者の理解の第一歩である。そして「認める」ためには、まず「知る」ことが前提となる。

世の中には、自分だけが存在するのではなく、また家族や自分が知っている人だけが存在するのではなく、多くのさまざまな人が自分の知らないところに存在し、自分と同じように生きていることを知らなければならぬ。しかもこのことは、年齢が小さいうちから「実感」できるように、親や保育者・教

育者が伝えていかななくてはならない。

日本の幼児は、ほとんど異文化にふれる機会がない。核家族化が進んでいるために、身近に高齢者がいない。また障害者のことを「じろじろ見てはいけません」と教えられており、身近な存在として感じてはいない。そしてさらに、ピアノや勉強や水泳などいろいろなことが「できる人」が「良い、価値が高い」と教えられている。今の子どもにとっては、「できなければ良くない」のであり、幼少期から単一の価値観が備わってしまっている。価値観を多様化させる学習をする最も大切な時期に、「速く、たくさん、上手にできれば良い」とする価値観を強く身につけてしまう。障害者や高齢者は「速く、たくさん、上手に」はできないことが多いので、人としての価値が低いと子どもに感じさせてしまう。

子どもの発達や理解の程度に応じた幼児期からの系統的な障害理解指導が必要とされる理由がそこにある。

## 話題提供2：絵本や人形を用いた障害理解指導

水野 智美（桜花学園大学）

最近、障害のある人が登場する絵本が多数出版されるとともに、車いすを使用している人形、盲導犬のぬいぐるみなどが売り出されている。これらの絵本や人形等を使うことによって、日常的な遊びの中で、子どもたちは楽しみながら世の中にはさまざまな障害のある人がいることに気づき、障害に関するファミリーリティを高めることができる。また、絵本や人形等は、視覚的な情報があるために、言葉の理解が不十分な幼児にも、障害や障害のある人に対してイメージしやすく、興味や関心を持たせやすい。そのため、幼児期には、絵本や人形、ぬいぐるみの積極的な活用が求められている。

障害のある人が登場する絵本は、視覚障害者や車いす使用者などの visible な（目に見える）障害のある人を扱った作品が多いが、近年、知的障害を扱った作品も少しずつ増えてきている。

また、最近発刊されている絵本には、障害のある人の日常生活や障害の特性、対応の仕方などを具体的に示しているものが多く、これらの作品を通して障害のある人の生活を身近に感じ、どのように接していけばよいかを間接的に知ることができる。

ただし、障害のある人の登場する絵本の中には、「障害のある人は努力して一生懸命に生きている」という論調の話や潜在的に優れた能力があったためにまわりから認められるという話もある。これらの論調の話を読み聞かせる際には、子どもに障害のある人に対してステレオタイプのイメージを持たせないように配慮する必要がある。

さらに、絵本や人形、ぬいぐるみなどを子どもたちに与えておけば子どもたちの障害に関する関心が自然と高まると考えるのではなく、子どもの知的好奇心を満足させられるような大人の適切なかかわりが必要不可欠であることも忘れてはならない。

#### 話題提供3：盲導犬を題材とした障害理解指導

石上 智美 (筑波大学大学院)

従来、盲導犬・点字・手話・車いすは、子どもに対する障害理解指導の題材として用いられることが多かった。特に盲導犬は、テレビで特集される機会が多く、また児童書や漫画本が数多く出版されており、子どもにとって身近で親しみを持ちやすい存在となっている。したがって盲導犬は、子どもに視覚障害に対するファミリーリティを持たせるための最も適した教材であると言える。

今日では、幼稚園や保育所において盲導犬使用者が講演をする機会があるが、「犬をさわらせる程度にしている」というケースや「幼児に対してどのように話せば理解してもらえるのかわからない」というケースがみられる。このようなケースにおいて、幼児に対する教育的な配慮がなされているとは言いがたい。幼児に対して盲導犬を題材とした障害理解指導を行う場合、「盲導犬に関するどのような内容を、どのような方法で、誰が行うか」について十分に検討しなければならない。

石上・富樫・望月 (2002) は、盲導犬使用者を対象に調査を行い、「幼児に理解してほしいと思う内容」を明らかにした。その結果、盲導犬使用者が幼児に最も理解してほしい内容は「盲導犬に関するマナー (盲導犬に勝手にさわってはいけない、盲導犬に食べ物やあててはいけない、盲導犬を見たら大きな声を出して近づいてはいけない)」であることが確かめられた。次いで多く挙げられた内容は、「盲導犬

は視覚障害者の歩行の手伝いをする犬であること」であった。

ここでは、これらの調査結果をもとに、幼児に対する盲導犬を題材とした障害理解指導を行う際にもどのような内容を取りあげるべきかについて、障害理解の視点から述べたい。

#### 話題提供4：幼稚園における障害理解指導の実践

田中 敏子 (高岡西幼稚園)

統合保育の推進にとまない、障害のある子どもが在籍する幼稚園が増えている。また、アトピー性皮膚疾患のある子どもや外国籍の子ども等他児と何らかの違いのある子どもが存在することも多い。障害のある子ども等と一緒に生活していれば、健常の子どもたちの障害のある子ども等への理解が自然と進み、優しく接することができるようになると考えられてきたが、実際には単に時間と空間を同じにしていれば、障害のある子ども等への理解が進むのではなく、反対にいじめや疎外の対象になることがある。

障害のある子どもに対する他児のかかわり方は、かかわりをもちたがり、面倒をみながらタイプ、できればかかわりをもちたくないと避けるタイプ、変わった存在として傍観しているタイプの3タイプに分けられる。障害のある子どもにかかわりをもって子どもはそれほど多くなく、またかかわったとしても障害のある子どもを赤ちゃん扱いして、障害のある子どもができることまでも先に手を出してやってしまうことが多い。このような子どものかかわりは、「障害のある子ども＝手伝ってあげるべき存在」として子どもたちに印象付けられてしまう可能性がある。そのため、障害のある子どもとどのように接していけばよいかについて、保育者として見本となるかかわり方を子どもたちに示していくと同時に、障害について子どもたちがわかるように伝え、障害のある子どもと適切なかかわりができるように理解指導をしなくてはならない。また、クラスに在籍している障害のある子どもについて理解させるだけでなく、世の中に存在する障害のある人について子どもたちに伝えていくことも大切である。その際には、障害に関してネガティブな印象を持たせないように配慮することが重要である。

ここでは、幼稚園において実践している障害理解指導の様子を紹介するとともに、障害理解指導を通じて子どもたちがどのように障害や障害のある人について考えるようになるかについて報告する。